**◎ロダン 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　４月２４日**

●グセルによる「考える人」評（９章）

「考える人」では、いくら絶対を抱擁しようと思っても、**どうにもならない「瞑想」が**、おそろしい努力をしながら、屈強な**肉体を縮ませては押しまげ、球のようにまるめては押しつぶしています**。

**（別訳）『考える人』に於いては、空しくも絶対を抱擁せんと願う瞑想が、その恐ろしい努力の下に力士の肉体を縮ませ、それを撓（たわ）め、それを丸めて粉砕しております**。

**In your Thinker, meditation, which desires in vain to embrace the absolute, contracts the athletic body under its terrible effort, bends it , curls it up, crushes it**.

◎「第８章：芸術における思想LA PENSÉE DANS L’ART」

**●瞑想と手足（872）**

（古川訳）ある日曜日の朝、ロダンと一緒に彼のアトリエの中にいたとき、私は彼のもっとも迫力に富む作品の一つでもあるものの複製［moulage＝塑像］の前に立ちどまった。

それは**肉体が苦悩によじれ曲がった**美しい若い女である。彼女は秘密の**苦痛にさいなまれている**のであろう。その頭は深くうなだれている。その唇と眼蓋は閉ざされて、人は眠っているのだと思うかも知れない。しかし**顔に現われた苦悶が、彼女の心中の激しい争をあばいてみせる**。これを見る人をいたく驚かすものは、それが**腕も脚をも持っておらぬということである**。

彫刻家が自分自身への不満の余りにそれを打ち砕いたものとみえる。そして人はこれほどの力強い像が不完全であるのを惜しまずにいられないのである。人は、それが受けた無残な切断を悲しむ。私が抑えがたいこの感情を主人の前に表わしたとき、

（ロダン）何という非難を私にされるのです？　（彼は若干驚いて私にいった）**それは計画なんですよ**。私の像をこの状態にしておいたというのが。

　それは**『瞑想』**を表わしているのです**。動かそうにも腕がなく、歩もうにも脚を持っておらぬのはその為なのです**。思索が余り先まで押し進められると、遂にそれは正反対な決意に至極く尤もらしい理屈を思いつかせて、**最後には惰性（**inertie）**を誘致する**、ということを貴方は全くお忘れになったのでしょうか？

（グセル）この数語は、私を再び最初の感銘へ立ち帰らせるに充分であった。かくて私は心おきなく、眼前に置かれた彫像の気高い象徴主義を讃えた。

この女性は、私は今や理解したのであるが、それは彼女の**解きえぬ数々の問題に否応なしに駆り立てられ、実現することのできぬ理想にとらえられ、抱き締めるすべもない無限に悩まされている人智の寓意**（emblème）なのであった。

この胴（トルス）の攣縮は思想の懊悩と、それが解答することのできぬ問題を掘り下げようとするその輝かしい、だが空しい根気とを現わしていた。そして四肢の切断は、**実際生活において瞑想的な魂が感ずる打ち勝ち難い嫌悪を示す**ものであった。

（●内藤訳）

**「瞑想」**(**Méditation**)というところですよ。だから、**何かをする腕も持っていないし、歩くための足も持っていない**のです。思索というものは、それが極端になると、まったく反対の決定をするために、いかにも尤もらしい議論の拠りどころを思いつかせて、**ついには人を無気力（**inertie）**にしてしまう**。どうです、君はこんなことに気づいたことはありませんかね。

（グセル）問題の女は、実現することのできない理想につきまとわれ、つきとめることのできない「無限」になやまされて、解決できないさまざまな難問題に一も二もなく唆（そその）かされている**人間知性の象徴**（emblème）**だった**。引き釣っている胴体(contraction)には、責めさいなまれている(torture)心の中と、解答をあたえることはできないながらも、いろいろな問題を掘り下げて行く執拗（しつよう）さ、**花々しくはあっても結局は無益な執拗さ**がはっきり窺（うかが）われた。

　そしてまた、手足が断ち切られているところには、**瞑想を事とする人が、実際生活にたいして感ずる打ち勝ちがたい嫌悪の情が示されていた**。

「人間は深く考えこむと、**しまいには、なんにもしなく(inaction)なりがちなものだ**」

（古川訳）『**極端に深い考えはまことにしばしば無為(inaction)に至る**』

（内藤訳）ほんとうをいえば、すべてが思想です。すべてが象徴です。

そんなわけで、**人間の形と姿勢は、必然的にその心の感動をあらわすのです**。肉体はつねに、その包んでいる精神のあらわれです。だから、物を見る心得のある人にとっては、裸体はもっとも豊富な意味をもつことになる。輪郭のおごそかなリズムの中には、**フィディアス**のように偉大な彫刻家だと、神の「叡智」が全自然の上にひろげた**うららかな調和**をみとめるのです。おっとりしていて、よく釣合がとれていて、**力と美しさとで光っている胴体**が、偉大な彫刻家には、**世界を支配している全能な理性(raison)**を思わすことができるのです。(979)

（古川訳）**それまでは未知であった豊かな富を、彼等自身の中に見出させる**からです。**生命を愛する新たな理由［レゾン］を、身を処すべき新しい内面的光明を、彼等に与えるからです**。

◎「第２章：芸術家にとっては自然のすべてが美しい」

「自然」の中で、普通「醜さ」といわれるものが、芸術の場合には、大きな美しさになることがある。（186）

現実の世界では、いびつなもの、不健康なもの、病気だとか、虚弱だとか、苦痛だとかいう考えを暗示するもの、健康と力のしるしでもあり力でもある規則正しさに反するものが醜いといわれます。せむしも醜いし、がにまたも醜いし、ぼろを着た貧乏さも醜い。

不道徳な人間、身持の悪い罪づかい人間、社会の害となる異常な人間、そういった人間の心と行いがまた醜いなら、親殺しや、裏切者や、なんの反省もない野心家の心も醜い。

悪いことしか期待できない人なり物事なりが、憎々しいという形容詞でしめ括られることに、間ちがいはありません。

しかし、偉大な芸術家や偉大な作家が、そういった醜さのうちどれか一つをとりあげると、忽ちのうちにその様子を変える…魔法の杖でも打ち振るようにして、美しいものをつくり出すのです。まったく錬金術めいたしわざです。妖術めいたしわざです。…

シェイクスピアがイヤゴーやリチャード三世をえがくときにしても、またはラシーヌが、ネロ肯定と奸臣ナルシスをえがくときにしても、あんなに明徹な心をもった人たちの解釈する心の醜さは、「美」のすばらしい題目になるのです。

というのは、芸術の場合、「性格」をもっているものだけが美しいからです。（207）

　「性格」とは、美と醜とを問わず、ともかく自然のすがたの強い真実そのものです。「二重の真実」と呼べば呼ばれるものです。

また、「性格」の力だけが、芸術の美となることから、「自然」の中で醜いものであればあるほど、「芸術」の中で美しいことがよくあります。［西田が引用した文］(215)

（高村訳）「性格」に力だけが「芸術」の美を成すところから、**「自然」の中で醜いものほど、芸術の中で美しいという事がよく起ります**。

芸術家にとっては、生活ははてしない楽しみです。不断な喜びです。無我夢中な陶酔です。(230)

（●高村訳）彼にとって生活は無限の悦楽です。不断の大歓喜です。狂猛な酣酔です。

しかし、芸術家にとっては、すべてが美しい。なぜなら、精神的な真実の光りの中を、たえず歩いているからです。（232）

芸術家は時として、心をさいなまれることがある。しかし、その苦しさよりもっと強く、理解し表白することに、痛切な喜びを感ずるのです。何を見るときにも、運命の意図をはっきりつかむのです。自分自身の悩みにも、また**どんなにひどい痛手にも**、芸術家は運命のさばきを察した人間として、感激のまなざしをそそぐのです。**親しい人に欺かれるようなことがあったら**、その場は動揺しても、やがてはまた立ち直ると、**不実な人を、さもしさの立派な手本のように思って**、しずかに眺めるのです。恩知らずな行いも、自分の心が豊かになる経験と見てありがたく思うのです。無我夢中になる様子が、時には人に恐れを抱かせることがある。しかし芸術家にとっては、それがやはり一つの幸福です。なぜなら、**真実にたいする絶えざる愛のわざ**だからです。(234)

（古川訳）真実への不断の熱愛

◎「第６章：女の美しさ」

**●「内なる焔」**

（古川訳）人体、それはなかんづく**魂の鏡**です。そこ（魂）よりしてそれの最大の美は発するのです。… 我々が**人体において崇め称えるもの、それは、あの様に美わしい形にもまして、そこに火と燃えるが如く歴々と見られる内なる焔である**のです。

（高村訳）**人体こそ、わけても魂の鏡**です。そしてまたそれ故にこそ最大の美が存するのです。… **われわれが人体に讃美するところのものは、いかに形は美しくともそれより以上のものです。透き通してそれを照りかがやかせるかと見える内面の火**です。

◎「第９章：芸術における神秘」

●パルテノンのアフロディテ

（内藤訳）三人の女がすわっているだけのものだが、その姿勢はじつにうらやかで厳かで、何か目にみえない巨大な存在とつながりを持っているように見えます。

（高村訳）この三人の女が坐っているに過ぎません。がその姿勢が実に滑らかで実に高貴で、まるで**眼に見えない絶大なある物に関与している**気がします。

（古川訳）それは三人の坐っている女に過ぎません、しかし、そのポーズがそれほど清朗で、荘厳なので、何かはわからぬながらそれが**重大なあるものに通ずる**がごとくに思われるのです。

●大いなる神秘（不可知の領域）

（内藤訳）じっさい、女たちの上には、大きな神秘が支配している。無形な「道念」が支配しているのです。そして全「自然」がそれに服従し、女たちはまた女たちで、天の命をうけて「道念」に仕えているわけです。

（高村訳）彼らの上にはまったく**大きな神秘が統治しています**。即ち、**無形な、永遠な「理法」**です。**これには全「自然」が服従します。そしてこの女神もまた彼ら自身その天上界の召使なのです**。

（古川訳）全く彼女達の上には**大きな神秘が支配しています**。すなわち、全自然が服従し、そして彼女達自身さえ天界における召使である**無形の、そして永遠の『理』**。

◎「第１０章：フィディアスとミケランジェロ」

**【l’équilibre**. **Posture pleine d’abandon et de grâce**. **】(1154)**

（高村訳）**閑雅と優美に満ちた姿勢**。

**The pose is full of abandon and of grace**.

（内藤訳）生きていることの痛ましい反省、根気はあってもそれにまつわる不安、成功の望みがないのに行動する意志、あてもないあこがれに責めさいなまれる人間の苦しみ、ミケランジェロの彫像のねらいは、だいたい、こういったところにあるでしょう。(1195)

**力というものは、しばしば美しさと一つのものになるし、そしてほんとうの美しさには力がある**。

（高村訳）いや、決して**どんな芸術家でもフィディアス以上にはなれないでしょう**。なぜといえば進歩は世の中には存在するが、芸術には存在しないからです。いっさいの人間の夢が一殿堂の破風の中に閉じ込められ得るような時代に輝いたこの最大彫刻家は、永遠に無比でいるでしょう。 (1306)

（内藤訳）ミケランジェロはけっきょく、中世時代を身に体した最後で最大の人なのです。

自己反省、苦痛、生活の嫌悪、物質の鎖を断ち切らんがための戦い、これこそはミケランジェロの心にやどった霊感の要素です。(1321)

「囚われ人」はどれも、わけもなく切れそうな綱でつながれています。しかし、つながれているとはいっても、わけても精神的につながれているということ、ミケランジェロはそういう意味をこの像で示したかった。なぜなら、作者はこの像で、法王ジュール二世に制服された国王のみじめさをあらわしてはいても、一方では、象徴的な価値をこの像にもたせたからです。つまり、**囚われ人のひとり一人が、肉体の衣を破って、限りない自由を身につけたいと思う人間のたましいです**。

（古川訳）彼の**囚われ人の何れも全ては、限りない自由をわがものにしようとして、その肉体の外皮の蓋いを剥がそうと願った人間の霊なのです**。

（高村訳）**彼の作ったすべての彫像は息のつまるように緊張していて、それ自身破壊する事を欲しているかのようです。すべてがその中に住んでいる絶望のあまり強い圧迫に今にも身を投げ出しそうです。**ブオナロッティは年を取った時、実施にその彫刻を破棄するに至った。芸術はもう彼を満足させなかった。彼は無限を欲したのです。

（内藤訳）**彼のつくった彫像は、どれもみな身にせまる束縛に悩んでいて、自分で自分を打ち砕きたがっているように見えます。**どれもみな、巣食っている絶望がぴしぴし圧しかかるので、今にもそれに負けてしまいそうです。ミケランジェロは老年となって、自分のつくった彫像をほんとうに打ちこわすような始末になった。もう芸術では満足できなくなったのでした。無窮がほしくなったのでした。(1329)

（高村訳）ミケランジェロの好んで取る画因、人間精神の深みとか努力と苦痛との神聖とかいうものはもとより一つの厳然たる偉大です。**けれども私は彼の生活侮蔑には賛成しません**。地上の活動は、いかに不完全であるにしても、なおかつ美しくていい。**努力をそこで尽し得るという事のためにだけでも生活を愛しましょう**。…

しかし、彼が生活をさげすんだ点になると、どうも賛成できない。この地上での活動は、どんなに不完全でも、やはり美しくて立派です。**努力をすれば、どんなにも努力ができる場所だという意味で、生活に愛をもとうではありませんか**。

◎「第１１章：芸術家が世の中のやくに立つこと」

　工業家は、商標の名誉を維持しようとはせずに、まやかし物をつくりながら、できるだけ金を儲けようとばかりする。労働者は、正当さに大小はあっても雇主を目の敵きにしてやっつけ仕事をする。今の人間はほとんどみな、**仕事というものが人間の存在理由とも幸福とも見なさるべきだのに、それを必要でも恐ろしいことのように考えているらしい。呪わしい賦役のように考えているらしい**。

（古川訳）実業家はその商標の名声を維持しようとはせずして、ひたすら製品を粗造しながら同時に出来るだけ多くの金銭を儲けようとのみしています。労働者たちは、多少とも理由のある敵意を彼等の雇主に対して燃やし、自分達の仕事を片づけてしまいます。今日のほとんどすべての人は勤労をやむをえぬのろわしい必要事、いとわしい労役と考えているように見えますが、それどころか、**労働こそは我々の生存理由（レーゾン・デートル）にしてかつ我々の名誉である**と見るべきものでありましょう。

**芸術は人間にその存在理由を教えます**。生きることの意味をあきらかにするのが芸術なら、人間にその運命について明るい目をもたせる、したがって、生活の方向づけをするのが、また芸術です。